

国史大辞典に見る土木史用語に関する調査*

A Reserch on the Terms belonging to History of Civil Engineering
written down on the "Kokushi Daijiten" (Encyclopedia of Japanese Historical Terms)

知野 泰明**・藤田 龍之***

By Yasuaki CHINO and Tatsushi FUJITA

概要

本調査は日本史用語辞典『国史大辞典』(吉川弘文館)に掲載された土木史に関する用語を抽出し、その傾向を検討、考察したものである。調査の結果、同大辞典には従来の土木史研究ではほとんど認識されてこなかった用語が多数あること、また、逆に土木史では最重要な事項が掲載されていないという事実が明らかとなった。

1. はじめに

平成9年(1997)4月1日、第1巻の発刊から18年と1カ月を経て、ついに『国史大辞典』が完結した。同書は、吉川弘文館から発刊された全15巻17冊(15巻のみ上, 中, 下巻)からなる日本歴史辞典であり、戦後初の大辞典でもある。編集委員会は昭和40年(1965)に発足以来、編集方針の検討、収載項目や執筆者の選定が行われ、隣接部門については各専門家の指導を受けながら審議し、記述の正確にして客観的な歴史辞典の編集に鋭意努力が払われたという¹⁾。執筆者は第1巻発刊当時の依頼数で2,000名に達し、掲載された項目数は最終巻の発刊段階で約54,000項目となった。

同書は歴史学の一角である土木史研究を行う場合にも、有益な情報を与えてくれるものになると思われる。そこで、本研究は、土木史研究において大著『国史大辞典』を利用する際の一助となるべく、同書には土木史に関する用語の中で、何が掲載され、その数がどの程度であるのかを調査したものである。この結果によって、同書から得られる情報をある程度予測することが可能となる。更には、史学では土木史用語の中でどの分野や時代のものが用語と

して認識されているのかといった傾向を把握することができ、かつ、今後、土木史自らが用意しなければならない用語説明の範疇が明らかとなった。これら結果のデータが多いため、本報告では、人物に焦点を絞り、その傾向を例示することにした。

2. 『国史大辞典』について

調査結果をみる前に、『国史大辞典』にある掲載用語の選択方針について記しておく。

(1) 対象学問分野について

『国史大辞典』第一巻の「例言」では収載項目について以下のような定義がなされている。

「一 本辞典に収録する項目は、日本歴史の全領域を網羅し、さらに広く考古学・人類学・民俗学・国語学・国文学・などの隣接諸分野にも及んだ。また、主要な典籍・古文書・記録や、書誌学・古文書学・史科学、史学史関係の項目も多数採取して、研究の便を図った。」²⁾

このように、単純に史学関係のみならず、多岐にわたる分野が選択対象とされた。

(2) 年代について

掲載された用語の年代範囲については「例言」において以下のように定義されている。

「9 時代の呼称は、原則として古代・中世・近世・近代・現代とした。また、大和時代・奈良

*Keywords: 土木史用語, 国史大辞典

**正会員 博(学術) 日本大学工学部助手 土木工学科
(〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定)

***正会員 工博 日本大学教授 工学部土木工学科

時代・平安時代・鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代・安土桃山時代・江戸時代・明治時代・大正時代・昭和時代などの通用の時代区分も適宜用いた。」³⁾

このように対象年代は古代から現代に及んでいる。

(3) 参考文献と執筆者について

参考文献と執筆者について次のようにある。

「四 記述の最後に、基本的な参考文献となる著書

・論文・史料集をあげ、研究の便を図った。

五 項目の最後に、執筆者名を()内に記した。」⁴⁾

このように、各用語の説明単位で参考文献や執筆者が記されており、研究者、その他の追調査に便宜が図られている。

以上のような定義の下に編纂された『国史大辞典』において、土木史に関する用語がどのように扱われているのか、次章以降、簡単に概要を報告する。

3. 土木史用語の抽出結果と考察

『国史大辞典』にみられる土木史用語を表-1にまとめた。

表-1 『国史大辞典』にみる土木関係用語の数

分類	細分類	項目数	分類	細分類	項目数	分類	細分類	項目数
遺跡 計65	遺跡	45	交通 計32	駅	10	測量		3
	役所	11		河川	3	地域名		16
	環状列石	6		船運	1	地質		4
	巨石	1		史料	2	地名		122
	住居	1		税制	1	庭園		3
	寺	1		制度	2	鉄道		17
開墾 計4	開墾	2		塚	1	トイレ		4
	開拓	1		渡	10	道具		23
	計画	1		その他	2	道路		6
会社 計17	建設	4	災害 計15	研究所	1	都市計画		4
	工場	1		地震	10	土地用語		11
	材料	4		台風	1	度量衡		26
	住宅	1		津波	1	トンネル		6
	鉄道	3		水害	2	年代名		13
	電気	2	材料		2	農業	新田名	27
	道路	1		柵	14	計75	制度	24
	財閥	1	事業		11		その他	24
街道 計65	街道	24	事件 計20	一揆	13	橋		39
	越	7		事件	4	藩		11
	峠	4		騒動	3	碑		2
	道	20	時事問題		2	人物		274
	路	10	施設		14	文化		1
学問 計3	気象	1	施設林		12	墳墓 計225	古墳	168
	地震	1	船運 計34	職	4		陵	41
	地質	1		船	17		その他	16
干拓		7		その他	13	水 計213	池	17
技術 用語 計12	技術	4	宿場		6		河川名	52
	城	1	荘園		8		河川技術	8
	測量	2	職名		56		河川施設	31
	鉱山	1	史料 計83	地方書	5		河川制度	14
	施工	1		図面	29		ダム	4
	林業	1		測量	6		河川、他	12
	労働	2		農書	5		上水	28
技術者		13		風土記	2		湖	3
教育		2		報告	3		用水	24
行事		3		度量衡	1		その他	20
業種		6		その他	32	港 計23	津	11
行政機関		18	城址		234		泊	6
行政用語		1	神籠石		9		湊	4
国名		7	信仰		4		その他	2
軍備施設		6	神社		6	都 計22	京	2
建築		25	制度		31		宮	20
公園		8	関所		15	総計		2013

(作成：知野)

(1) 全体の傾向

抽出された単語の総数は2,013件であり、これは『国史大辞典』の総項目数、約54,000の内の3.7%である。この抽出された用語を表-1のように分類した。同表については更に年代別に分類し、どの時代の用語が掲載されているかという傾向も明らかにする予定であるが、紙数の都合上、本報告では特に人物の項目を古代から近世と近代以降に分け、史学と土木史の注目項目の違いを提示する。その前に、全体の傾向としては、多くの単語が古代から近世における用語であり、近代以降の単語のみある分類としては会社、学問、教育、業種、時事問題、鉄道、トンネル、ダムなどがある。その他の分類の多くは古代から近世の用語のみか、いくつかの近代の用語が含まれているという傾向にある（詳細は今後、報告する）。

(2) 『国史大辞典』にみる人物名

『国史大辞典』に掲載された土木に関する人物数は表-2①の通りである。

該当する人物は274名であり、この内、近代以降に土木で業績を残した人物は65名、全体の24%である。残りの209名(76%)が古代から近世の間に業績を残した人物であり、同辞典では近代以前の人物が圧倒的に多く掲載されていることがわかる。

同書が注目した土木に関する人物274名の内、土木史も着目してきた人物がどの程度あるのかを知るために、土木学会編纂『土木と200人』に掲載された人物との比較を行ってみた。

その結果が表-2の②、③である。②は『国史大辞典』と『土木と200人』に掲載された人物の数を、

表-2 『国史大辞典』で掲載された人物の年代別割合と、『土木と200人』でも掲載された人物の割合

	掲載書名	古代～近世	近代以降	計
①	『国史大辞典』	$\frac{209}{274}$ 名 (76%)	$\frac{65}{274}$ 名 (24%)	274名
②	『土木と200人』 200人中でも掲載 された割合	$\frac{27}{200}$ 名 (13.5%)	$\frac{15}{200}$ 名 (7.5%)	$\frac{42}{200}$ 名 (21%)
③	『土木と200人』 200人全員の年代 別人数	$\frac{51}{200}$ 名 (25.5%)	$\frac{151}{200}$ 名 (75.5%)	202名

(注：最下段の合計が202名となるのは、近世と近代にわたる人物1名を両方に加えたため。作成：知野)

古代から近世に業績を残した人物と、近代以降に業績を残した人物に分けて記したものである。生没年が近世から近代にわたる人物については、土木に関する業績が多い方の年代に含めた。『土木と200人』中で『国史大辞典』にも掲載された人物数は200人中42名(21%)、この内、古代から近世では27名(200人中13.5%)、近代以降は15名(200人中7.5%)であり、近代以前の人数が多いことがわかる。

しかし、表-2の③は『土木と200人』全員を近世と近代を境に分けた人数を示したものであるが、これを見ると近代以前の人物は200人の約4分の1、近代以降の人物が、約4分の3となっている。『国史大辞典』では近代以前の人物が約4分の3を占めていたことと比較すると、『土木と200人』の傾向は逆で、近代以降の人物が主に注目された。

さらに『土木と200人』で注目された近代以降の人物151名中で『国史大辞典』で注目されたのは15名であり、10%に過ぎないのであった。

表-3は表-2で示された両書掲載の人物名をまとめたものであり、史学と土木史が共通で注目した

表-3 『土木と200人』中で『国史大辞典』に掲載された人物名

古代～近世までの人物	近代以降
井沢弥惣兵衛	浅野総一郎
板屋兵四郎	井上勝
伊奈忠克	大倉喜八郎
伊奈忠尊	大林芳五郎
伊奈忠次	沖野忠雄
伊奈忠順	笠井順八
伊奈忠治	金原明善
伊能忠敬	後藤新平
加藤清正	清水喜助
川村重吉	仙石貢
河村瑞賢	田辺朔郎
行基	古市公威
空也	松本莊一郎
熊沢蕃山	物部長穂
佐藤信淵	安井道頓
角倉了以	計15名
計31名	

(注：生没年が近世から近代に及ぶ人物については、活躍した時期に従って年代を分類している。

伊奈氏について『土木と200人』では「伊奈一族」としてまとめて扱われているので、表-2②の古代～近世までの人数が計27となっている。作成：知野)

著名な人物である。これ以外に『国史大辞典』では近世までの土木に関与した人物181名が掲載されているのである。また、逆に『土木と200人』にはあって、『国史大辞典』にはみられないといった、土木史では注目されながらも史学からは注目されていない人物も多く存在する。

明治前半に活躍したお雇い外国人技師を始めとする外国人士木技術者について『国史大辞典』に注目すると、その掲載は皆無であった。同書にみる外国人は地震学者「ウォートルス」のみであった。

3. まとめ

本調査は、『国史大辞典』には、どのような土木関係用語が掲載されているのかといった傾向をつかみ、今後の土木史における利用に供することと、土木史自らが研究すべきテーマを明示することにあつた。調査結果全体の傾向は、紙面の制約上、今後、順次、発表していく予定である。ここでは、今回の報告から言えることをまとめておきたい。

①『国史大辞典』では、多岐にわたる土木分野の用語が掲載されていることが分かった。その追調査に

おいては、各用語の説明末にある参考文献が良い案内役になると考えられる。

②『国史大辞典』にみられる土木関係用語は近代以前のものが多い。この中には、これまで土木史では余り知られていない物や人物が多く、土木史自らが追調査を行ったり、土木史が認識すべきものが多いことが分かった。また、逆に土木史がこれまで注目していた近代以降の用語や人物の多くが『国史大辞典』に掲載されていないことが分かり、土木史自身が用語説明を用意し得る、または、しなければならないものも多くあることも分かった。

以上のように、本調査の結果、土木史の調査対象は『国史大辞典』とは重複しないものが多くあり、土木史自らが明らかにしなければならないものも多く残されていることが分かった。また、史学では良く知られていながら土木史では認知すらされていない用語や人物が多くあることが分かり、史学の成果から土木史が学ぶべきことも多く存在していることが明らかとなった。

こうした用語として、どのようなものが存在するのか詳細については、今後まとめて行く予定である。

1) 国史大辞典編集委員会：『国史大辞典』第1巻、吉川弘文館、序文pp. 2～3、昭和54年3月1日。

2) 前掲：『国史大辞典』第1巻、例言p. 1.

3) 前掲：『国史大辞典』第1巻、例言p. 2.

4) 前掲：『国史大辞典』第1巻、例言p. 3.